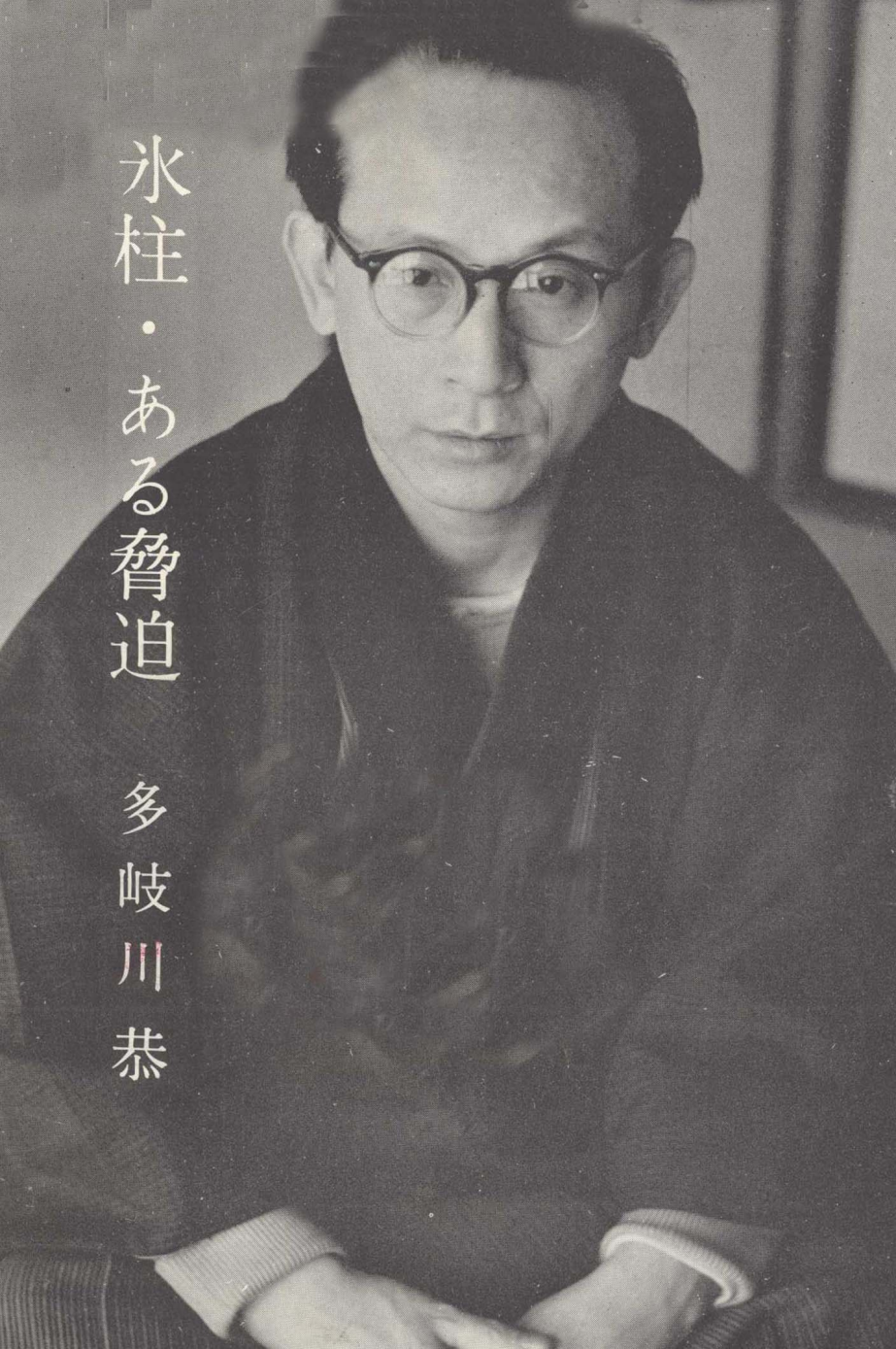
多岐川 恭

氷柱＋ある脅迫

河出書房新社



氷柱・ある脅迫

多岐川恭

Kawade Paperbacks 29

氷柱・ある脅迫

装幀者　原　弘 (NDC)

© 1963

昭和38年4月1日　初版印刷
昭和38年4月5日　初版発行

定価　200円

著者　多岐川　恭
発行者　河出孝雄
印刷者　小泉輝章

発行所　東京都千代田区神田小川町3の8　株式会社　河出書房新社
電話 東京(291)3721～7
振替口座　東京　10802

印刷・小泉印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えします。

目次

氷柱……五
ある脅迫……一三七
落ちる……一五三
俘虜コーエン……一七三
おれに似たやつ……二〇三
あとがき……二二一

表紙絵　勝呂　忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

氷柱・ある脅迫

氷

柱

はしがき

雁立市（かりたちし）――もちろんそれは架空の都会である。人口は十万から十五万、日本の端から端まで、位置や気候こそことなれ、これらの多くの地方都市は不思議なほどに似よった外観をもっている。それはほこりっぽく、散文的で、美的要素を欠いている――本篇の舞台となる雁立市も、そういう小都市の一つである。

外観が似ているように、中に住む人々の生き方や考え方も、似たりよったりのものであろう。それはいずれ劣らず、好色であり、詐謀にみち、貪欲であり、卑劣であり、また時には愛にあふれ、純真であり、勇敢であるだろう。ありきたりの町、ありきたりの人々の織りなす人生の模様は筆にするに退屈である。

しかし、この町に一人の変った男が住んでいた。いや、変った男と言ってはあたらないかもしれない。むしろ彼は、片隅にひっそりとして、誰の眼をも引かない平凡きわまる男だと言ったほうが事実に近いであろう。――ただしこの男は、ふとしたことからある独創的――と彼の考える――行為を思いつき、それを実行することに成功した。それはある犯罪の形をとった。作者は、その男の手記の形式でこの物語を進めてゆくことにしよう。事実は、彼は手記などを書く男ではなかった。

灰色の序曲

一

この風景の主調は灰色だ。歩きながら、ふとそれに気がついた。さびれた一本道を私は歩いているのだが、十メートルくらいの幅の、アスファルト鋪装の所々はげたその道はまっすぐに坂を登り、一筋の灰色をきわだたせている。地平のあたりに町工場の屋根が見え、それは黒い。その背後から私の真上まで、灰色の雲におおわれた空だ。落日の頃ならば、いくらか紅味がついていたろうが、今はたそがれで、雲の色の濃淡もはっきりしなくなっている。

道の左右にはポツリポツリと家があり、どの家も面白いほど色というものがない。漂白でもされたように、屋根といわず壁といわず、窓や戸口のガラスさえ灰一色である。この道は谷になっていて、私の歩いている右側は家並のうしろがコンクリートの崖。その上を鉄道が通る。左側は石垣で、その上はまた道路になっているが、ここからは何も見えない。あるものは灰を流した空だけである。

間遠くならんだ街燈の灯がやや濃さを増す。また家々の燈火の黄色い明るさも深さを加えてくるが、これらは灰色の風景のアクセントになっているにすぎない。

私は毎日たそがれ時に、目的もなく歩く習慣なのだが、

この道はあまり歩いたことがない。それにしても、この灰一色の風景は私にしっくり合っているように思われる。人もほとんど通っていず、たまにすれ違う者もみな灰色の中にはめこまれて、私になんの刺戟も与えないので、落ちついた気分を乱されることがない。

私は一本道をそうやって歩きながら、とりとめもない考えを追い、また現実に返って家々の燈火を眺めるのが——しいて言えば楽しい。ずっと昔にチェーホフの「燈火」という短篇小説を読んだことがあり、筋は忘れたが、燈火というものについての印象が私と一致しているので、深い感銘を受けたことがある。人生のあらゆるものが燈火に象徴されている——その楽しさ、苦しさ、悲しさ、そしてはかなさ——私は昔から遠く近くの家の燈火を見ると常に新しく、強くそれを感じる。

それはおそらく感傷といってよいものであろう。そして感傷は自己が傍観者であることから生まれるのであろう。私は常に傍観者であったし、今後も傍観者であることを変えようとは思わない。

地平のあたりに見えた町工場が近づいて、トタン板かなにかで、つぎはぎだらけの建物のあらゆる隙間から光が洩れているのが見わけられる。もうあたりは暗くなり、人通りも絶えた。私が歩いている間、三四台の自動車が私を追い越して行っただけである。私は同じ道を引き返した。

二

その子供は道の片隅にコロリと仰向けになっていた。七八歳ほどの女の子である。スカートのまくれた細い両足を人形のように開いて伸ばし、下駄は両方ともどこかへ飛んで見えなかった。びっくりしたままの、大きく見開いた両眼が、かすかに街燈の光を映している。私はキュッと肩の上でちぢめた腕にさわり、手首を握ってみた。次に洋服の背中のホックをはずし、胸を開いて手をあててみたが、脈はなかった。夜目にははっきりしないが、服装は貧しいようだった。

私はしばらく女の子の乱れた頭髪を撫でながらしゃがんでいた。どこかに傷があるのか、出血があるのか、それは暗くてさぐりあてることができなかった。だが闇をすかしてみて、下駄のありかはわかったので、両方ともまた女の子にはかせ、服装をととのえてやってから立ち上がった。

倒れていた位置は家と家との中間で、そこから上の道路へ通じる小道があるらしかった。女の子は小道を走りくだって、この道に出た時に自動車にはねられたのであろう。

私はその場を立ち去りながら、せめて外傷が見えず、お人形のようなままで死んでいるのが幸いだったと思った。それは女の子らしく、生と死の間を縄飛びと同じような軽さで、ピョンと飛び越えているような感じだった。この死は、彼女にとって惨酷なものではなかった。

無心のうちに、無心のままで死ぬこと、それは私にはむしろ幸運と思える。彼女がもし生き永らえていたとしたら、どのように成長し、どのような道を歩んだであろう。そして心はどのように複雑になり、どのようにゆがんで行ったであろう。——私は漠然と頭を横に一つ振り、帰路を急いだ。一度振り返ってみたが、もう女の子の姿は闇にとけこんで、消えていた。

今日の散歩は往復で三キロほども歩いたろうか。体が温まって、頬を撫でる早春の風が快かった。私はまた、今日のような淋しい道でなく、ネオンに彩られたにぎやかな街筋を歩いて、さまざまな通行人が身にまとっている生活の陰を眺め、立ちならんだ商店の内部に眼をとめて、それらの小さな営みが生み出す哀歓を想像するのを楽しみにしている。私は、自分の住むこの都市のほとんどあらゆる街路を毎日あてもなく散策するのだが、どの街路も、与えられる印象は微妙にことなっているのが私を興がらせる。この町——雁立市と、そこに住む住民はちょうど舞台の背景と登場人物のように見え、私は孤独な観客ででもあるようだ。私は目の前に展開する筋のないドラマを、ただ眺めるだけで満足している。私自身がその中で、なんらかの役割を演じようという興味はまったくないのだ。

今夜は私の気分は冷たく澄んでいる。その底に、あの女の子の死が沁み入るような味を添えている。私は常に死の近くにいるので、「死」という事実は、私に衝撃や恐怖感を与えない。

三

一本道をそれて、何度か悪い道路を折れ曲ると、立木の多い住宅地になる。それもずっとはずれのほうに、高い杉の木ばかりを防風林のように植えめぐらした一郭があり、入口の鉄門に「小城江」という小さい名札がかかっている。それが私——小城江保のすみかだ。もし私の家を訪れる物ずきな人があるなら、彼は鉄門を入ってから、さらに小道がうねうねと木々の間を縫って走り、いつ玄関に到着するかわからぬような気がして驚くに違いない。それは私の好みから出たことなのだ。私の宅地は広く、一種の森とも言える。その森の真中に、私はごく小さな家を建てているのだ。

玄関のドアを鍵であけ、いつものように戸じまりをすませてから、すぐに書斎に入った。窓ぎわの椅子に身を深く埋めて、窓の外を見上げると、樹々の梢のシルエットの上に星がまたたいていた。雲が切れはじめたのであろう。灯りをつけず、そのままじっとしていると、婆やの政が熱いレモンの絞り汁を盆にのせて入ってきた。いつもの習慣である。

「電気もつけずに、何をしていらっしゃいますか」

政はそうつぶやくように言いながらスタンドの灯をつけ、黙ったまま煖炉のガスをつけにかかった。永らく私と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一緒にいる政は私の気持をよく呑みこんでいて、必要以外の口をきくことはない。
「女の子が死んでいてね」
私はポツンと言った。政はゆっくり振り返ると、さぐるように私を見た。
「本当でございますか。どこで？」
「なんという通りかな。汽車道の横の坂道だ。行く時はそういうものはなかったが、帰りに、道ばたに転がっていたんだ。自動車か何かにはね飛ばされたんだね」
「死んでおりましたか。けがをして気を失っていたのじゃ……」
政は、せきこんだ真剣な口調で言いながら、どこか非難めいた、強く押してくる表情だった。
「脈を見たが、死んでいた。傷がなくて、人形のようにきれいだったよ」
政は深くうなずいて溜息をついた。
「かわいそうに、どこの子でしょう。そのはね飛ばした自動車は逃げたんでしょうか」
「逃げたんだ。私が歩いている時に自動車が三台か四台通ったんだが、そのうち、どれかがやったことだろう」
「なんというひどいやつでしょうね。旦那様は、すぐ警察へお知らせなすったでございましょうね」
「知らせていない」
「じゃ、すぐお電話なさいまし。警察へは早く知らせないといけませんですよ。そんな運転手はすぐ捕まえなけりゃ、死んだ子供がかわいそうじゃございませんか。そんならあたくしが……」
そう言うが早いか、政は卓上の受話器を取り上げていた。旦那様は、冷淡な……という非難が彼女の肩先から読みとれた。私は静かに政から受話器を取り上げた。
警察はすぐ出た。若い男の声だった。私は女の子の死んでいる状態と場所を告げると、先方がいらだたしく呼びつづけるのを無視して電話を切った。住所氏名を告げてかかり合いになるのを避けたのである。
昨夜と同じように私はしばらくミルの自伝を読みつづけた。何げないふうな行文のなかに、天才的な頭脳の明晰さがよく出ているのがひどく面白かったが、これほどの聰明な男が、女性崇拝の固定観念を脱していないのが不思議であった。——そのあと、まだ眠気がやってこないので、久しぶりにバッハのピアノ曲のレコードを聴いた。その非情で明澄な音色の中に、私はあの女の子の静かな死体が浮び上がってくるのを感じた。
床に入っても、女の子は私の瞼から消えないのだった。そして、私を追い越して行った自動車の細部が次々に私の記憶に返ってきた。やがて私は、記憶のゲームに夢中になっていた。極度に頭を集中すると、記憶に欠けている小さな事柄が次第にあるべき場所にはめこまれてゆく。私は眠ることをあきらめ、寝間着のまま机に坐ると、雁立市の電

話帳を繰りはじめた。時計が二時を報ずるのをうつつに聞きながら、それでも私は電話帳のページを繰り、自動車の所有者と思われる家の番号に赤鉛筆で印をつけるのをやめなかった。なぜそう夢中になっているのか自分でもわからず、私は何度も苦笑した。少くともそれは、政のような、憐れみと正義感から出たものでないことは確かだった。

四

翌朝、ゆで卵とトースト二切れに紅茶の簡単な食事をすますと、おだやかな光のみちた縁側の長椅子で新聞をひろげた。女の子の身許はどうなのか、また逃げた自動車と犯人は発見されたかということに、やはり私は興味をひかれていたのである。

その記事は社会面の片隅に小さく一段で出ていた。女の子は花房ルリ子と言い、小学校の一年生で、花房登喜子という女の娘である。家は五間道路というから、昨夜私が散歩した一本道にそった家のどれかなのだ。職業は記事の中に出ていず、想像するほかはないが、いずれ母子二人きりの豊かでない暮しであろうと思える。

かんじんの犯人はまだ逮捕されていない。おそらく市内の営業用、自家用の車で、昨夜のあの時刻に外へ出ていたもの、そして五間道路を通ったものを調査しているのだろうが、私には発見は疑問のように思われる。記事を見ても、自動車はタイヤの跡をまったく残さず、目撃者も名乗り出ていない。小さい女の子をはね飛ばしただけでは、車体になんらかの傷がついているとも考えにくく、おまけに、女の子は私の見たところでは出血していなかった。

警察にとって、こんな事故は決して珍らしくないだろう。新聞を読む者も、こんな記事はほとんど無関心に読み飛ばしてしまうに違いなく、これまでに多くの犯人が捜査の眼をうまくのがれて、しばらくすると犯人自身も警察も事故そのものの記憶を失うのであろう。

私もまた冷淡な読者の一人だったかもしれないが、この場合は最初の死体発見者が私であったし、女の子の現実の肉体に触れたという体験は、私の気持を微妙に変えていた。

私は外出の支度をして玄関へ出た。政がびっくりした顔で私のうしろへついて来た。

「おでかけでございますか？」

私は夕食後の散歩以外にはめったに外出することはないので、政は、今時分いったいどこへ行くのかと不審に思ったのである。

「警察へ行ってくるのさ」

「警察へ？　旦那様が？」

「昨日女の子をはねた自動車がまだ捕まっていない。私はちょっと心あたりがあるから助言しに行こうと思うんだ。役に立てば捜査の無駄がはぶけるわけだから」

政は感激した様子で、しきりに旦那様を見直したという意味のことをしゃべっていた。

雁立市の警察署まではかなりの道のりだったが、ゆっくり歩いて行った。その間、私は日頃に似ないこういう積極的——私にしてみれば、積極的な行動を私にとらしめているものはなんだろうと考えていた。それは、かなり強い力で私を動かしているものである。説明できそうでできないうちに、官庁や銀行のならんだ大通りに出た。雁立市署は役所の建物の中でも最も老朽した、ねずみ色の三階建で、石段を上がり、ドアを押して中へ入るのは初めてだった。受付の巡査に名前と用件を告げると、巡査は少し興奮した表情になって、すぐに私を捜査課長のところへ連れて行った。

五

「昨夜すぐにでも連絡なり、おいでになるなりしていただきたかったですなあ。じゃあ電話されたのはあなただったのですね。係の者が、あなたの住所氏名を尋ねる前に電話を切ってしまったというのですが……」

名刺を見ると、捜査課長由木浩志とある、三十半ばであろう、長身で面長の、皮膚の浅黒い男で、広い額から眉宇にかけての相好は、強い意志力と聰明さを漂わせているのが私を話しやすくさせた。

「死体があるという事実だけをお話しすればよいと思ったのです。死体は私が見たままを発見なさったはずだから、捜査は専門のあなたの領分で、私などは何も御参考になることを知っているわけではないので、私の名前などをお知らせする必要もあるまいと考えたわけでした」

「いや、どんな些細なことでも、案外私たちの参考になることがあるのです。ことに最初死体を発見されたのはあなたですから。かかり合いたくないというお気持はわかりますが……」

「今朝の新聞をみて、まだ自動車が発見されていない様子なので、これはかなり捜査が困難かもしれないと思われるので、とにかくやってきたわけなのです」

由木警部は笑顔になってちょっと会釈した。

「いやどうも。昨夜からずっと市内の自動車を片っぱしからあたったし、近接の市町村にも手配しているのですが、これといったはっきりしたのが摑めていません。というのは、そいつは何も証拠になるものを残していないのです。タイヤの跡でもはっきりしていれば手掛りはつくのですが、アスファルト道路で駄目だし、時刻も今のところ漠然としたもので、アリバイ捜査もやりにくいわけです」

「その点は私が助言できますね。私は昨夜あの道を散歩に出かけたのです。家を出たのはうす暗い……五時半頃でしたろうか。近所の道をぶらぶらしてから例の五間道路に出、まっすぐに坂の上の町工場のあたりまで行ってから引き返しました。で、行きには死体はなかったのです。私が帰宅したのは六時半過ぎで、従って死体を発見したのは六時十分前後ということになりましょう。行きに死体の場所

を通ったのは、まず五時五十分頃と思いますから、事故が起ったのは五時五十分から六時十分の間と考えて間違いないと思います。私は時間についてはかなり正確なほうなので……」

由木警部は心中で明かに私を非難しているに違いなかった。彼の唇はいくらか引きしまってきた。

「それをきのう知らせて貰えばねえ。しかしまあ、それだけでも大いに助かりますよ。それで、あなたが散歩している途中、あの道を自動車が通ったはずですが……」

「実は、伺ったのはそのことなのです。自動車が三四台私を追い越して行ったのは覚えているのですが、それ以上はっきりした印象は私に残っていない。……残っていないと思いこんでいたのが、夜おそくなって、考えるともなくそのことを考えているうちに、色々と思い出してきた。そして、今ではかなり正確に、追い越した自動車についてお話できるつもりです」

由木警部は緊張した表情になり、眼は強い光を帯びてきた。いつの間にか二三人の刑事がテーブルのまわりで身を乗り出している。

「最初に私を追い越したのは灰色の小型の車でした。自動車のことはくわしくは知りませんが、あの型は国産のようでした。スピードは二十キロ前後と思います」

「乗っていたのは？」

由木警部は手帖にメモしながら訊いた。

「運転手だけです。自動車番号の札は黄色でした」

「どっちの方向に行ったのですか？」

「まっすぐ、坂の上で見えなくなりました。他の二台も同じです。その次はトラックでした。黄色に車体を塗ってあって、積荷はないようでした。運転台に運転手と助手が二人乗っていて、何か話し合いながら追い越して行きましたが、スピードは前の車とほぼ同じ……いくらか早かったかもしれません。ドアのあたりに『自家用』という字が書いてありました」

「前の車との間隔は？」

「時間で言って三分くらいでしょうか。小型が坂の上で消えて、しばらくして私を追い越しました。最後がやはり乗用車で、これは黒い色の大型です。乗っていたのは運転手が一人で、この運転していたのはかなり若い男のようでした。番号札は白で、かなりの高級車といった体裁でした」

「スピードは？」

「三十キロから四十キロでしょう。トラックが見えなくなってから、これも三分か四分たった頃私を追い越して行きました」

由木警部はしばらく考えていた。私は自分の話をこれで終ったわけだった。昨夜考えたことで、私なりの解釈は持っていたが、述べるべき事実は以上に尽きている。

「あなたのほうに向ってきた車はなかったのですか？」

「私があの道を歩いていた限りではありません。女の子を

はねたのは、その三台のうちの一つであることは確かでしょう」
「ありがとうございました。これでメドがつきましたよ。あなたのように明確に覚えていられる証人も珍しい。運転手の態度などで、変った点はありませんでしたか。あわてた様子だったとか……」
「それは覚えておりません。というより、みな正面を向いて、ごく普通に見えましたからね。ただトラックでは話し合っていましたが、女の子をはねて、その善後策を講じているといった感じは受けませんでした。そのうちの一人は、たしか白い歯を出していたように記憶しています」
由木警部はうなずきながら、突然こう言った。
「あなたは観察力のよく発達した方ですな。僕などよりずいぶん頭もよさそうな方だ。……年上のあなたに失礼な言い方かもしれませんが、どうもそう思える。三台のうち、どれが子供をはねたか、あなたにお考えがあるのでしたら話していただきたいですね」
私は由木警部に好意を持ったが、私の考えを話す気にはもちろんならなかった。
「いや、門外漢の私の意見など、それこそ物笑いでしょう。それより、女の子の死因はなんですか。私の見たところでは外傷はなかったようですが……」
「頭を強く打たれて骨折しています。ショック死を起したのですね」
「何をしにあの道に出たのですか。何か買物の使いに行ったにしては何も手に持っていなかったでしょう。崖上の道で遊んでいたのでしょうか」
「母親は遊んでいたはずだと言っています。夕食後すぐ遊びに出たか、母親が出したか、とにかく母親の登喜子は使いには出していません。まあはっきり言えば、登喜子は客をとっていたのですよ」
私は、花房という母子二人の家族の暮しをそれで想像することができた。私はそれ以上聞くことをやめ、立ち上がった。由木警部は礼を述べてから、しばらく私の名刺を見ていた。
「小城江保さん……上青田町というと、あの住宅地だな。あのあたりの家は、妙な、森のように木の多い所がありますね。ひょっとすると、あの家が……」
「そうです」
「どうも、あなたは変っておられますなあ。人間嫌いですか」
私は苦笑した。
「そう言ってもよろしいでしょうね。ただ、私は人間嫌いというほど自分を高く買っていないだけです。人間の関係がわずらわしいのですよ。わずらわしいというのは、多分私自身のつまらなさからくるのでしょう。私の望みは、静かにしていたいということです」
「しかし御商売は何かやっていられるのでしょう？」

「私は遊民です。何もしないのですよ。私のような無力な男に何ができるでしょう」

六

警察に出頭して証言したのは、私にとって生まれて初めての経験だった。捜査課長といった人間に会ったのも初めてだったが、この由木警部は私にいい印象を与えた。私の証言は捜査にかなり重要な手掛りを与えたはずであり、それが由木警部の役に立つのは悪い気がしなかった。しかしこれ以上事件に関係する気はなく、得体の知れない私の愚かな興味も打ち切るべきだった。

警察から帰ったあとしばらくを私は庭の見廻りにすごした。空は薄曇っており、立木や芝は冬枯れのままちぢかんだ姿をしていた。

庭といっても、方式に従って造園したわけではない。そういう人工の匂いは私にとって我慢のならないもので、買い取った広い原野を、ほとんどそのままに手を加えずにいる。椎や樟などの野生の喬木があちこちにそびえ立ち、杉木立の斜面は昼も暗いほどに梢が陽をさえぎり、地面は褐色の朽葉でおおわれている。源を市の南方の丘陵から発する小川が、工合よく私の庭を横切って流れていたので、私はある部分をせきとめて池を造った。私はこの広い庭を常に歩いて飽きることがなかった。それは季節によって驚くほどあざやかな変化を見せ、私は思いもかけぬ所に桜の古木を発見したり、豊かにみのったざくろに突きあたったりするのだった。小川の岸のやわらかい草の上に横たわると、流れのかすかなつぶやきにまじって様々の小鳥の声がひびいた。時に私はつたにおおわれた四阿に腰を下ろし、持参のフルートを吹いた。地上の何人にも劣らない豊かさを私はこの庭において持っていた。私は社会とのあらゆるつながりをここで遮断することに成功したのである。

私は水の少くなった川にそって歩いた。川の面は鈍く冷たい光をもち、岸辺の小石を洗っていた。なんの木か知らぬ丈の高い落葉樹の網目のような梢から、数羽のひよどりが一斉に飛び立った。向うの杉木立は敵意を持ったようにくろずみ、沈んでいた。そういう風景が私を誘ったのであろう、五間道路に転がった女の子の死体がはっきりと私の瞼によみがえって来た。私はしいてその幻を追い払おうとはしなかった。それは沈痛な冬の風景と合っていた。永遠に静止したものの美しさが、そこにはあるようだった。

――政が私を捜しあてたのはそういう時であった。由木警部から電話があり、会ってもらいたい人がいるから、すぐに出向いてくれないかというのだった。

調べ室というのであろう。汚れてガランとした中に古ぼけた事務机や、抽斗のない長いテーブルが無造作にならべられた部屋に私は通された。由木警部が私を迎えた。テーブルには一人の若い男が掛けていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com